

平成 31 年 4 月 24 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03079

研究課題名（和文）出土文献に基づく春秋史認識の再検討

研究課題名（英文）A RE-EXAMINATION OF RECOGNITION OF HISTORY OF THE SPRING AND AUTUMN PERIOD BASED ON EXCAVATED TEXTS

研究代表者

吉本 道雅（YOSHIMOTO, Michimasa）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：70201069

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：『左伝』、『国語』、諸子百家、『史記』など戦国秦漢諸文献の春秋史に関わる記述につき、その内容に加えて使用言語を分析することで、それらの地域性・時代性を確認し、前4世紀から前2世紀における春秋史認識の推移を具体的に解明する。使用言語の分析には、『郭店楚簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国楚帛書』などの出土文献を活用する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

春秋時代の具体的なイメージは、前4世紀前半の『左伝』に基づくが、前3世紀に成書した『国語』やその他諸子文献、前2世紀末の『史記』の記述と比較すると、春秋史認識の変化が認められる。近年、前4世紀後半に遡る出土文献が豊富に獲得されるようになり、春秋史認識の推移をより具体的にたどることが可能となった。本研究によって、一般的に歴史記述が史実である以上に認識であること、現代社会を根源的に支配する歴史認識が実は相対化可能であることが広く認知されよう。

研究成果の概要（英文）：This research project analyzes use language, as well as contents, of descriptions on history of the Spring and Autumn period in literatures of the Warring States, Qin, and Han periods such as the Zuozhuan, Guoyu, Hundred Schools of Thought, and the Shiji, confirms their locality and chronology, and concretely clears the transition of recognition of the history of the Spring and Autumn period from the 4th century B.C. to the 2nd century B.C. Excavated texts such as the Guodian bamboo slips, the Shanghai Museum bamboo slips and the Qinghua bamboo slips are actively utilized for analyzing use languages

研究分野：中国古代・中近世史

キーワード：左伝 国語 春秋時代 歴史認識 上博簡 清華簡

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は1980年代より、先秦史および先秦期を扱った資料の研究を進め、『中国先秦史の研究』(2005)を上梓した。ついで、研究対象を東北アジア史に転じ、基盤研究(c)「内蒙古東部における青銅器文化関係資料の調査に基づく先秦時代北方民族の研究」(2006-2008年度)・三菱財団人文科学助成金「内蒙古東部の出土資料の調査に基づく鮮卑・契丹の民族史的研究」(2008年度)・基盤研究(c)「内蒙古東部・遼寧西部における出土資料の調査に基づく鮮卑・契丹史の研究」(2010-2012年度)では、出土文字資料・考古資料との相互参照によって、東北アジア諸民族に関する中国文献の記述を批判的に分析した。中国文献はその情報の豊富さからいって、東北アジア諸民族の「史実」に接近するための最も有益な材料であるが、より直接的には中国人の東北アジア諸民族に対する「歴史認識」を示すものに過ぎないことがあらためて確認された。

ついで、基盤研究(c)「出土文献に基づく左伝学の再構築」(2013-2015年度)では、研究対象を中国古代史にもどし、出土文献に基づく知見を梃子に、戦国秦漢諸文献における『左伝』受容の実態を研究した。この研究計画の一つの動機が、2011年12月に公刊された『清華大学蔵戦国竹簡[弍]』に収録された『繫年』の出現である。『繫年』は西周～戦国前期を通時的に扱うが、『左伝』専用語ともいべき句法・語彙が多用されており、明らかに『左伝』を最も重要な藍本としている。さらに同じく『左伝』を藍本とする『国語』に『左伝』専用語がほとんど出現しないという事実は、『繫年』が年代的に『左伝』『国語』の間に位置することを傍証する。これらの知見に基づき、「清華簡繫年考」(2013)および「国語成書考」(2014)を公刊した。

「清華簡繫年考」は、『繫年』全23章の注釈的論考だが、予想外の国際的反響を呼んだ。研究代表者はつとに「周室東遷考」(1990)(『中国先秦史の研究』(2004)第二部上篇第一章)において伝世文献の断片的な記述を批判的に分析することで、平王の洛陽奠都が『史記』十二諸侯年表の前770年ではなく、「前738年以降」であると考証していた。『繫年』第2章は周王朝東遷について伝世文献に見えない独自の記述を多く含むが、奇しくも洛陽奠都を前738年に繋げているのである。この結果、「周室東遷考」があらためて注目されるようになり、2014年11月12日～12月17日には、学振の外国人招聘研究者(短期)を得て、沈載勳(Jae-hoon SHIM)檀国大学校教授を招聘し、「『繫年』および『史記』十二諸侯年表に見える周王朝の東遷」の題目にて共同研究を行った。沈教授はシカゴ大学で学位取得ののち、シカゴ大学・イエール大学で10年にわたって教職に就き、韓国のみならず中国語圏・英語圏をも含めた代表的な先秦史研究者の一人であり、旧友であるLothar von Falkenhausen UCLA教授の紹介によって知遇を得たものである。共同研究は沈氏の論文「伝来文献の権威に対する新しい挑戦 清華簡『繫年』の周王室東遷」(『歴史学報』221、2014年3月)を素材に進められた。この論文は、中国語圏のみならず、英語圏の先行研究を手際よく整理しているが、あらためて気づいたことは、『繫年』第2章の内容が直接的には「史実」ではなく、前4世紀に獲得された断片的な材料を綴合した「歴史認識」に過ぎないという事実である。先行研究は沈氏を含めおおむね西周史の分野に属するが、最も遺憾とするところは、『繫年』をも含めた戦国文献の記述をただちに「史実」として扱い、同時代史料である西周金文や考古学的資料と安易に吻合することである。これは、先秦史研究が通時的にではなく、西周史・春秋史・戦国史と分断していることにも起因する。

ここで、あらためて、先秦時代における歴史認識の推移を包括的に論ずることの必要を

痛感した。研究代表者は、「清華簡繫年考」「国語成書考」においても、これらの春秋史認識のありかたを論じている。すなわち『繫年』は晋楚争覇の歴史として第5～第23章において春秋～戦国前期を描き、晋楚擡頭的前提として第1～4章において周王朝の衰退を記述する。『国語』は晋語を中心に 晋文公・悼公の覇権に重点を置いた晋覇の歴史として春秋史を記述していたが、周語（鄭語を含む）・魯語・楚語を加えることで、周王朝の衰退から晋覇の時代としての春秋列国史に改変され、さらに齊語・吳語・越語を附加することで、五覇（齊晋楚吳越）の歴史に改変された。

ついで、研究代表者は、『左伝』の定量的分析を進め、その研究成果の一部を、「『左伝』と春秋史」（2015）として公刊した。本論文は、『左伝』の日月の分布を検討したもののだが、結論として以下の所見を得た。『左伝』は722-468BCの255年間を扱う、これを85年ずつ、前期（722-638BC）・中期（637-553BC）・後期（552-468BC）に三分し、日月数を統計すると、前期においては鄭荘公に関わる前710年代・晋文公に関わる前630年代を除くと日月数が少ない。中期では前590年代以降、日月数が増加に転じ、後期の前540年代には日月数が最大値に達する。以後は減少に転ずるが、依然高い数値を維持する。同じ傾向は『左伝』の字数にもうかがわれるが、こうした日月数・字数の増減は晋覇の動向に対応する。とくに後期前半（552-506BC）の数値が高いことは、『左伝』の関心が晋覇の解体過程にあったことを示唆する。本論文は、「清華簡繫年考」「国語成書考」とともに、『左伝』を起点とする戦國中・後期の「左伝学」が、晋系に属することを再確認するものとなる。

『左伝』の予言記事に同じく定量的分析を施すことで、その春秋史さらに戦国史認識を確認したものが、「左伝の予言」（2016 予定）である。とくに戦国史の予言は、周王朝・晋の没落、三晋の擡頭、鄭の世族の盛衰など前370年代から前360年代初頭の事件を対象とするものに集中しており、『左伝』編纂者の同時代的に最も重要な関心が、晋覇解体を基軸とする晋地の動向にあり、そうした動向の起点としての関心が『左伝』の春秋史の記述にも反映していることを確認した。

このように、研究代表者は現時点で『左伝』およびそれを藍本とする『繫年』『国語』の先秦史認識についてすでにおよその研究を進めている。これは地域的には晋系の歴史認識を反映するものである。この間、『郭店楚簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国楚帛書』などの楚系出土文献は、『繫年』以外はもっぱら使用言語の時代性を判断するための間接的材料として用いてきたに過ぎない。

そこで、今回の研究課題では、まず、『繫年』がその藍本である『左伝』からいかなる事件を選択したか、また『左伝』の記述のいかなる部分の改変を加えているかを分析し、ついで『上博楚簡』の楚史故事を『国語』楚語の『左伝』と重ならない諸章と比較検討する。これらの作業を通じて、楚系の歴史認識の独自性が解明され、翻って晋系の歴史認識固有の特徴が再確認されるであろう。

一体、楚系出土文献の研究は、日本ではおおむね中国哲学史の専家が携わってきたこともあり、たとえば『上博楚簡』の楚史故事を歴史記述として扱い、その歴史認識を問題にするといった視点は希薄であったといわざるを得ない。本研究課題は、こうした先行研究の欠欠を補填するものに他ならない。歴史記述における「歴史認識」の解明は、迂遠ではあるが、その背後にあった「史実」に着実に接近するための不可欠の手続きである。単なる史料学にとどまることなく史学への一般的かつ深甚なる貢献を志向するものである。

## 2. 研究の目的

戦国秦漢諸文献の春秋史に関わる記述につき、その内容に加えて使用言語を分析することで、それらの地域性・時代性を確認し、春秋史認識の推移を具体的に解明する。使用言語

の分析には、『郭店楚簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国楚帛書』などの出土文献を活用する。

### 3. 研究の方法

戦国秦漢諸文献の春秋史に関わる記述につき、その内容に加えて使用言語を分析することで、それらの地域性・時代性を確認し、春秋史認識の推移を具体的に解明する。『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』などの出土文献を素材に、「前4世紀の楚語」に特徴的な語彙・句法を摘出し、前4世紀の『左伝』と前3世紀以降の戦国秦漢文献の使用言語比較の参照に供する。中国の関連研究機関において関連研究情報の収集につとめる。

### 4. 研究成果

#### 【平成28年度】

第一に、近年の研究の進展を踏まえて、研究代表者が作成済みの『郭店楚簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』の電子テキストを改訂した。第二に、清華簡『繫年』第2章の東遷に関わる記述を素材に、「周室東遷再考」を公刊した。研究代表者は、かつて「周室東遷考」（1990）において東遷の推移を復元したが、『繫年』は東遷に関わる独白の記述を含み、2011年以降、膨大ともいってよい研究が公刊されている。「周室東遷再考」は、第一章 平王擁立の地>1 南陽の申・2 姜姓・3 西申、第二章 攜王擁立の地 :1 カク・2 攜、第三章 平王・攜王の年代>1 平王東遷に関する諸文献の記述・2 攜王に関する「旧説」・3 『繫年』の年代観、の構成で、『繫年』およびそれに関連する研究の包括的な批判的検討を進めたものである。ついで「『左伝』『国語』の歳星記事」は、『左伝』成書年代に関する古典的研究というべき新城新蔵「歳星の記事によりて左伝国語の製作年代と干支紀年法の発達を論ず」（1928）を批判的に再検討し、『左伝』の歳星記事が385-374BCの歳星観測に基づくことを論じた。ついで「睡虎地秦簡年代考—日本における中国古代史研究の現状に寄せて—」は、避諱および特定の語彙を手がかりに睡虎地秦簡諸篇の抄写年代を考証し、『秦律十八種』『効律』『秦律雜抄』『法律答問』『封診式』：始皇元年(246BC)～五年(242BC)・『為吏之道』：昭襄王五十五年(252BC)～莊襄王二年(247BC)・『日書甲種』『日書乙種』：孝文王元年(250BC)以前、という結論を得た。第二に、国際的学术交流として、陝西師範大学講師・王紅亮氏との共同研究「清華簡『繫年』の総合的研究」を発足させ、東方学会主催国際シンポジウム「帝国の誕生 秦史再考」の企画に参加した。

#### 【平成29年度】

第一に、近年の研究の進展、新資料の公刊を踏まえて、研究代表者が作成済みの『郭店楚簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』の電子テキストを改訂した。ことに『清華』6(2016)の鄭武夫人規孺子・鄭文公問太伯・子産・管仲・子儀、7(2017)の子犯子餘・晉文公入於晉・趙簡子・越公其事は春秋時代を扱い、本研究課題に直接的に関係する。第二に、戦国中期における春秋史認識の一端を解明するものとして、「左伝と鄭」（印刷中）を執筆した。『左伝』は春秋後期前半における晉の覇権の解体を記述の重点を置く。一方で、鄭人の発言もこの時期に集中している。『左伝』が、この時代を語るにふさわしいものとして鄭人を選好したこと、さらに『左伝』の成書が鄭の滅亡を一つの動機としたことを解明した。ついで後漢前期における春秋史認識の一端を解明するものとして「『漢書』古今人表と春秋史」（2018）を公刊した。まずは『漢書』古今人表が特定の王侯ないし事件に関連する人物を群として排列していること、春秋部分については『史記』以上に『左伝』に取材していることを確認し、後漢前期における左伝学の勃興が、春秋史認識を大きく規定したことを解明した。第三に、東方学会主催のシンポジウム「秦帝国の誕生 英語圏の研究者との対話」（2018年5月19日）の予稿「『史記』の秦史認識」を執筆した。『史記』に先立つ戦国・前漢文献の秦に関する記述を『史記』のそれと比較することで、『史記』の秦史認識の特異性を確認した。本研究課題に直接関連することとしては、まず周の東遷について、『左伝』が晉・鄭を特記するのに対し、『史記』が晉・鄭

に全く触れず、もっぱら秦襄公に言及すること、ついで春秋期については『左伝』に由来する穆公に記述量が偏していることを確認した。

#### 【平成 30 年度】

第一に、上博簡・清華簡のうち、春秋～戦国前期の楚に関わる「成王為城濮之行」「莊王既成」「申公臣靈王」「靈王遂申」「陳公治兵」「平王問鄭寿」「平王与王子木」「昭王毀室」「君人者何必安哉」「命」「東大王泊旱」およびその他の諸国に関わる「鄭武夫人規孺子」「曹沫之陳」「競建内之/鮑叔牙与隰朋之諫」「鄭文公問太伯」「子儀」「子犯子余」「晋文公入於晋」「鄭子家喪」「姑成家父」「競公瘡」「趙簡子」「越公其事」「吳命」について先行研究を批判的包括的に整理した注釈を作成した。『左伝』『国語』との比較分析を進行中であり、前 4～前 3 世紀における春秋史認識の展開を解明しつつある。第二に、「『左伝』と鄭」（『中国史学』28、63-81 頁、2018 年 10 月）・「経伝長暦考」（『京都大学文学部研究紀要』58、35-142 頁、2019 年 3 月）を公刊し、「『史記』の秦史認識」（第 63 回国際東方学者会議東京会議：シンポジウム「秦帝国の誕生：英語圏の研究者との対話」、2018 年 5 月 18 日）・「前 4 世紀中国における歴史認識の変容：時代区分としての「春秋時代」の出現」（史学研究会大会、2018 年 11 月 2 日）・「中国先秦史研究の現況：『左伝』とその周辺」（京都大学文学研究科公開シンポジウム「京大古代学の最前線：古代への誘い」、2018 年 12 月 8 日予定）の講演を行った。第三に研究成果報告書を作成した。報告書の目次は以下の如くである。「周室東遷再考」「中国先秦史研究の現況：『左伝』とその周辺」「『左伝』と鄭」「経伝長暦考」「『左伝』『国語』の歳星記事」「前 4 世紀中国における歴史認識の変容：時代区分としての「春秋時代」の出現」「春秋時代」の出現」「睡虎地秦簡年代考：日本における中国古代史研究の現状に寄せて」「The Shih-chi's Perception of Ch'in History」「『漢書』古今人表と春秋史」。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

吉本道雅「『左伝』『国語』の歳星紀年」、査読無、『中国古代史論叢』9、1-23 頁、2017 年。

吉本道雅「睡虎地秦簡年代考 日本における中国古代史研究の現状に寄せて」、査読無、『中国古代史論叢』9、24-40 頁、2017 年。

吉本道雅「周室東遷再考」、査読無、『京都大学文学部研究紀要』56、1-58 頁、2017 年。

吉本道雅「『漢書』古今人表と春秋史」、査読無、『京都大学文学部研究紀要』57、1-62 頁、2018 年。

吉本道雅「『左伝』と鄭」、査読有、『中国史学』28、63-81 頁、2018 年。

吉本道雅「経伝長暦考」、査読無、『京都大学文学部研究紀要』58、35-142 頁、2019 年。

〔学会発表〕(計 3 件)

吉本道雅「『史記』の秦史認識」、第 63 回国際東方学者会議東京会議：シンポジウム「秦帝国の誕生：英語圏の研究者との対話」、2018 年 5 月 18 日。

吉本道雅「前 4 世紀中国における歴史認識の変容：時代区分としての「春秋時代」の出現」、史学研究会大会、2018 年 11 月 2 日。

吉本道雅「中国先秦史研究の現況：『左伝』とその周辺」、京都大学文学研究科公開シンポジウム「京大古代学の最前線：古代への誘い」、2018 年 12 月 8 日。

〔図書〕(計 3 件)

吉本道雅(共著)『中国古代史論叢 九集』、1-40 頁、中国古代史論叢編集委員会、2017 年。

愛新覚羅烏拉熙春・吉本道雅(共著)『ロシア・アルハラ河畔の女真大字墨書 女真・契丹文字遺跡をたどって』、153-161 頁、朋友書店、2017 年。

吉本道雅(単著)『平成 28 年度～平成 30 年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書 出土文献に基づく春秋史認識の再検討』、1-241 頁、京都大学文学研究科、2019 年。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。